

琵琶湖治水の先覚者

藤本太郎兵衛

親子三代



湖畔にたたずむ藤本太郎兵衛像

新旭町の夕暮原浜に精悍な表情でたたずむ姿（写真）は、琵琶湖の治水に生涯を捧げた志をしのばせるとともに、今もなお行われる琵琶湖治水の重要性を我々に訴えかけます。

人々を悩まし続けた「水込み」

滋賀県には509本もの一級河川が存在し、このうち琵琶湖に流れ込む河川は118本ののぼりです。高島市内からも多くの河川や地下水が琵琶湖に注ぎ込んでいますが、なかでも安曇川は、流域面積が310km<sup>2</sup>にのぼり、野洲川に次いで2番目の面積を誇るなど、豊富な水量をもたらす重要な河川のひとつです。

その一方、琵琶湖から流れ出る自然河川は瀬田川が唯一となります。現在は、南郷の洗堰によって水位と水量が管理されていますが、かつての瀬田川は川幅が狭く、山からの土砂が流れ込み川底に溜るなど、流出する水量は少なく不安定なものでした。また、琵琶湖の洪水は、河川の洪水とは異なり、その面積の広さから水位上昇、低下ともに時間がかかるため、ひとたび大雨が降ると行き場を失った水が琵琶湖に滞留し、湖面の上昇によって沿岸が浸水する「水込み」と呼ばれる水害に悩まされてきました（浸水日数が237日に及び

記録も残ります）。

周辺200か村の悲願!! 私費を投じ三代にわたった偉業

江戸時代以降、この水害をなくすために瀬田川の川底を浚い（浚渫）、流出水量を拡大する治水工事の実施が、琵琶湖周辺の村々から嘆願されました。しかし、浚渫による下流域での洪水を心配した江戸幕府が着手することはありませんでした。そんな琵琶湖治水という大きな難題に、高島郡深溝村（現新旭町深溝）の庄屋であった藤本太郎兵衛が立ち上がりました。初代太郎兵衛（直重）は、瀬田川の土砂は自普請（農民自らが費用を出し合って行う工事）による浚渫の必要性があると湖岸の村々に説き、177か村の賛同を得て、天明4年（1784年）に工事を始めることができました。しかし、十分な効果を挙げることができず、二代目太郎兵衛（重勝）による老中 松平定信への直訴や瀬田川下流の村々への説得が続けられます。

そして初代太郎兵衛から満50年目の天保2年（1831年）、三代目太郎兵衛（清勝）の時に幕府

からの許可をとりつけ、瀬田川の全長14km、出役31万人、工事費7654両（約2億5000万円）におよぶ治水工事が竣工されました。この浚渫は、琵琶湖周辺200か村の悲願を達成させる大工事となり、「天保の御救大浚渫」と呼ばれ今もなお語り継がれています。

岡文化財課 ☎(32) 4467

【報告】

昨年11月に国の文化審議会で選定が答申されていた重要な景観「大溝の水辺景観」が平成27年1月26日に正式に選定されました。

編集感

いよいよ3月。卒業の季節を迎えます。多くの人に支えられ、「学び舎」を巣立っていく子どもたち。つい、30数年前の自分に重ねて見つめてみる。取り巻く環境は大きく変わり、同時に子どもたちの数は著しく減少した。しかし、悩みながらも日々成長し、夢を膨らませていく子どもたち、子の成長を願い、導き・支える親や先生、そして彼らを温かく見守ってくださる地域の人々。「学び舎」を取り巻く人々の思いは変わらずに受け継がれているように思います。

今回の特集は、2つの小学校の閉校を取り上げました。大変寂しい現実ではありますが、それは新たな歴史への巣立ちとして捉えていきたいものです。いろんな人が集い、交流をとおして人財が育ち、やがて人々のつながりは新しい価値を生み出して更に広がっていきます。学び舎の次なるステージの始まりです。(Y)

広報たかしま

平成27年

3

月号 No.182

発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課  
〒501-1001 滋賀県高島市新旭町北畑ののの番地

☎0740(25)8000(代)  
http://www.city.takashima.lg.jp  
✉t:info@city.takashima.lg.jp

